

予習の問いが授業後のまとめ直しを促すか — 中1歴史の実践と分析 —

東京電機大学中学校・高等学校 田畑 佳介

実践年度

2025年

実践背景

【課題意識】

- 歴史では家庭学習の習慣が弱く、定期考査前の暗記中心の学習に偏りがちである。
- 講義形式が一般化する中で、生徒が主体的に考える学習活動を十分に保証できていない。

【生徒へのアプローチ 実践から期待する姿】

- 予習→授業→振り返りのサイクル、主体的に関わる生徒の育成
- 予習授業理解を支え、授業で情報を整理・再構成できる学習者の育成

実践方法

【実施対象】

- 中学社会(歴史分野)
- 中学1年生 5クラス
- 週2単位 1単位50分
- 2025年10月中旬～

【実践の流れ】

- 授業前の予習活動(問いづくり)
 - ■ 授業内活動(メモの記入、図・表の活用)
 - ■ 授業後の振り返り・理解の深化

【実践内容】

- 予習チェックシート(冊子)配付 ■ 予習範囲(ページ・行数)指定
- 予習の問いの型(「なぜ?」「そもそも～とは」)
- 授業最後に「次回の問い」提示(質問項目④)

取得データおよび検証方法

【取得データ 取り組みに関するアンケート】

■ 時期

- 1回目(12月初旬 2学期末考査後)
- 2回目(2月下旬 3学期学年末考査前)

■ 回答方式

(1~6)で回答、(4~6)を肯定意見と定義する (N=121)

【 A 予習(入口)・授業への見通し 】

- ① 予習をしてから授業に臨んでいる
- ② これを知りたい、これを理解しようと目的・目標をもって授業に臨んでいる
- ③ 自分なりに問いを持って授業に臨んでいる
- ④ 次回の問いがあることで授業のポイントを整理することができる

【 B 授業中の方略(参加のしかた) 】

- ⑤ プリントやノートにメモをしながら授業を受けている

【 C 振り返り(出口)・理解のモニタリング(メタ認知) 】

- ⑥ 授業後に内容を自分の言葉でまとめ直したりしている
- ⑦ 授業前と授業後で、内容の理解力に違いを感じることができる
- ⑧ 自分の試験結果が、なぜそのような結果か説明することができる

【 D 深い理解の方略(整理・比較・因果) 】

- ⑨ 人物や出来事を図や表に整理して理解するようにしている
- ⑩ 共通点や相違点に注目して理解するようにしている
- ⑪ チェックシートの授業の振り返りでは、原因と結果について整理することを心がけている

【 E 学習の自己点検(相互作用・テスト効果) 】

- ⑫ 人に問題を出すことで、自分の理解力を確かめることがある

【 F 介入(チェックシート)への有用感 】

- ⑬ チェックシートを使うことで、授業の内容を整理することができる

【検証方法】

1. 項目別の肯定割合・平均・分布を算出し、実態を把握
2. A~Fの肯定割合を算出し、サイクル(入口・授業中・出口)を比較
3. サイクルのつながりを確認し、相関を検証

結果

【実態把握】 ※12月初旬実施 1回目アンケート(N=121)
項目別肯定割合

区分	カテゴリ名	肯定割合	番号	肯定割合
A	予習(入口)・授業への見通し	71%	①	73%
			②	68%
			③	★70%
			④	75%
B	授業中の方略(参加のしかた)	87%	⑤	87%
C	振り返り(出口) 理解のモニタリング(メタ認知)	64%	⑥	★44%
			⑦	79%
			⑧	69%
D	深い理解の方略(整理・比較・因果)	60%	⑨	43%
			⑩	70%
			⑪	65%
E	学習の自己点検 (相互作用・テスト効果)	66%	⑫	66%
F	介入(チェックシート)への有用感	73%	⑬	73%

↓ 入口(A)→授業中(B)→振り返り(C)の弱いところはどこか

- ・①×③=60% (予習→問い)は比較的つながっている
- ・③×⑤=63% (問い→授業中の処理)もつながる
- ・③×⑥=34% (問い→授業後のまとめ直し)で大きく落ちる
- ・⑥×⑧=32% (まとめ直し→説明)

③-⑥ クロス集計	⑥肯定	⑥否定	合計	③-⑥	
③肯定	34%	36%	70%	肯-肯	48.6%
③否定	10%	20%	30%	否-肯	33.3%
合計	44%	56%	100%	差	15.3pt

【データより考察】

「問いを持って授業に臨んでも、授業後にまとめ直しの活動にうまくつなげられていない傾向が見られる」

【生徒の学習法の失敗例】

類型	内容の特徴	代表的記述
受動的インプット	見る・読むだけ	文字だけががめてた
丸暗記・表層記憶	単語・人物を点で暗記	つながりがわからなかった
ポイント依存	太字・マーカー中心	線を引いて満足した
作業化・整理不全	書くが再構成できない	整理するために書いたが整理できなかった

自由記述を分析すると、「見るだけ」「暗記だけ」「太字だけ」など、情報の再構成を伴わない学習が多く見られた。これらは⑥(自分の言葉でまとめ直す)につながりにくく、③→⑥で肯定割合が低下する背景要因を示唆している。

考察と今後の課題

本実践では、問いを持って授業に臨む生徒のほうが、授業後のまとめ直しに至る割合が高いという傾向が示された。一方で、③肯でありながら⑥否が36%存在し、「問いをつくる→理解をまとめる」への接続が不十分であることも明らかになった。さらに、自由記述では「見るだけ」「暗記だけ」など情報の再構成を伴わない学習が多く見られ、知識を一時的に記憶することにはつながっても、自分の言葉で整理し直す⑥の活動には結びつきにくいと考えられる。以上より、予習で問いを持つこと自体は有効であるが、振り返り(質問項目⑥)を個人に委ねるだけでは学習サイクルは十分に機能しないことが示唆された。今後は、授業の終わりに振り返りの時間を確保し、「何をどのようにまとめ直すのか」という型を明示的に示すことで、予習→授業→振り返りのサイクルの定着を図る必要がある。